

第7回（仮称）湯本豪一記念日本妖怪博物館（三次もののけミュージアム）
アドバイザー委員会 議事要旨

1. 日 時

平成29年8月10日（木）15:00～17:00

2. 場 所

三次市役所 本館3階会議室

3. 出席委員（五十音順，敬称略）

植田千佳穂（委員長），杉本好伸，湯本豪一

4. 議 事

- (1) 作木収蔵庫での整理について
- (2) 資料について（貸出要項と方針）
- (3) 企画展について
- (4) これからのスケジュールについて（連続講座〔講演会〕，イベントの日程）
- (5) 友の会・ボランティア制度について

5. 議事要旨

- ・上記議事について，事務局より説明後，討議が行われた。
- ・主な意見は以下のとおり。

（作木収蔵庫での整理について）

- ・資料搬入の予定について，収蔵庫の環境調査の結果によっては遅れる可能性がある
ので，環境調査の日程とあわせて早めに情報共有をお願いしたい。
- ・博物館の開館に向けたスケジュールを詰めていく必要があるので，次の委員会等で
提示されたい。

（資料について）

- ・これまでも，資料の貸出を，業者を通じてパッケージで行っており，博物館開館後
も貸出による歳入を見込めるのではないかという点と，貸出希望に対して，複数点
の場合等の対応を整理しておく必要がある。
- ・他の博物館では，基本パッケージがあって，カスタマイズが可能であったり，図録
の原稿やキャプション，展示会場のレイアウト設計など，ある程度，学芸員が行い，
企画料として収入を得ている例もある。企画についても，どのように組むかという
点も検討しておく必要がある。
- ・資料の閲覧については，学芸員の立ち合いのもとでの閲覧が基本である。長時間の
閲覧は通常業務に影響が発生する。ある程度，資料閲覧のオーダーが予想され，博
物館の使命として，できるだけ対応する必要もあるので，その辺のバランスをとり

ながら、閲覧希望への対応を決めておく必要がある。

- ・貸出期間については、資料によって、日数を決定する必要がある。錦絵などはある程度シビアに設定する必要がある。貸出先に学芸員がいない場合など、様々なパターンを想定し、内規のようなものを決めて運用することなども検討する必要がある。
- ・このような運用については、他館の情報を集めてヒアリング等を実施する必要がある。
- ・ある大学では、絵巻の閲覧申請をしても、実物の閲覧ができず、パソコンのデータ閲覧のみで、プリントアウトも枚数制限をかけられたこともある。組織によって考えが違い、内規も組織ごとに違うので、他館の状況を勘案して検討する必要がある。
- ・図書館等は、著作権によって枚数制限されることもある。妖怪博物館の肝は本物であることなので、基本の基となるこの部分については、もっと議論が必要である。
- ・まずは、これまでの三次市のルールを踏襲する面もあるが、委員の意見も踏まえて、公的機関という立場と収益の確保といった考えをどのようにバランスをとっていくか、そのための企画の在り方や関わり方など整理が必要である。
- ・専門家だから見せる、そうでないから見せない、といった線引きは難しい。目的をしっかりとヒアリングして、本物の閲覧が必要かどうかといったことを判断する。
- ・海外への貸出で、絵巻の軸が象牙といった場合、特別に軸を加工する必要性が生じる場合があるので、そういったことも想定しておく必要がある。
- ・問い合わせに対する三次市の基本方針を明示していく必要がある。整理期間中だから貸出できないといった方針も考えられる。

(企画展について)

- ・コレクションが三次市に移動して、実際に資料を整理しながら企画の案を練っていく必要がある。1つの資料でも、様々な切り口で利用できる。博物館の収蔵資料が中心となるが、他館等から資料を借りて実施していくことも検討すべきである。いろいろな仕掛けで見せるといったところも、今後、詰めていく必要がある。
- ・2020年のオリンピック・パラリンピックは、良い機会なので意識すべき。また、京都で開催される2019年国際博物館大会も、海外展開を考えた場合、良い機会である。妖怪は輸出できる文化であり、良い機会としてターゲットを考える必要がある。
- ・年間を通じて資料の展示で回すだけでなく、サブカルチャーもテーマとして考えるなど、現代の動きをとらえた展示等も必要である。木彫のみでも見ごたえのある展示ができる。伊藤若冲の作品なども人を呼べる展示となるのではないかと考えられる。

(これからのスケジュールについて)

- ・湯本コレクションのお披露目は、可能であれば、複数回実施したほうがよい。
- ・湯本委員には、資料の説明から日本の文化をどのようにみるかといった視点や、妖怪学といった視点でもっと話をしてほしい。「妖怪」といったキーワードに拒否反応を示す人がいると聞くため、文化的な観点からの視点を提示することで受け入れ

られるのではないか。

- ・ 日本文化に関連性がある方も含め、妖怪学といった視点でも検討する必要がある。
- ・ 講座については、オープン後も実施していく必要がある。オープニングに向けた取組とあわせて、開館後の講座計画も考えていく必要がある。
- ・ 神石高原町でNPO団体が行った絵巻を作る取組は、昔からの話を集めて絵巻を作ろうというもので、この取組の中で出てきたコンテンツの発想が面白く、今後、こうした取組にも広げていってはどうかと感じたので、こうした点からも、開館後のプランニングを検討する必要がある。
- ・ 連続講座等の広報について、他の例では、3か月くらい前に案内をし、2か月くらい前にチラシを配布できる状況を作っている。一つひとつの取組をしっかりと取り組んでいく必要があり、案内をすることで、様々な場面で情報が拡散するため、早め早めの広報に努める必要がある。
- ・ 博物館のオープンに向けて、準備段階にどのようなことができるか、計画的に取組を進め、様々な形で全国へ拡散させていく必要がある。
- ・ 11月26日のイベントは、個別にお知らせすべき方もいるので、時間的余裕を含めて配慮が必要である。

(友の会・ボランティア制度について)

- ・ ボランティア制度については、館としての組織、ボランティアの位置づけ、館として誰が向かい合うかといった点が重要となる。オープンに向けて、早い段階から育成に取り組んでいく必要があると思われる。
- ・ 奥田美術館の例では、サポートメンバー登録が200名を超えており、運営には欠かせないものとなっている。善意の下で参加していただくにはインセンティブのこともあるが、向き合う人が誰かといったところも重要である。館の規模によっては、ボランティアのための担当職員をつけているところもある。
- ・ 必要性はあると思われるが、どの分野を組織するかも検討が必要である。広島市であれば人が集まると思われるが、三次市では厳しい。博物館と拠点施設が一体化していれば、周辺の方の協力も得やすいと思われる。妖怪に興味を持ち、地域の歴史にも興味を持つ方はいる。そのような方の受け皿としての考え方もあるが、運営体制も一定程度整えておく必要がある。
- ・ 県立歴史民俗資料館の場合は、育てる会、友の会、ボランティアの3本建ての体制となっている。3つを兼ねている人はいないが、育てる会には地域の人、友の会には歴史好きの人、ボランティアには考古学博物館の希少性により参加する人、といった構成となっている。
- ・ 県立歴史博物館（ふくやま草戸千軒ミュージアム）は、福山市民で友の会を構成しているが、100名を切っている状況である。ボランティア、友の会がないと博物館は活性化せず、博物館のコアな部分が形成されないので、講演会や展示会を開催した際に、熱心に参加される方などを集めていく必要がある。

6. 非公開の理由

（仮称）湯本豪一記念日本妖怪博物館（三次もののけミュージアム）の基本計画については、施設、事業、運営等について作業の途中過程を事務局から説明し、委員にそれぞれの立場から率直な意見をいただいた上で、今後、総合的に再整理して基本計画として取りまとめていくことにしている。そのため、会議を公開することにより不当に市民の間に混乱を生じさせるおそれがあることから、非公開にて委員会を開催し、議事概要について公表する。